

III. 研究員の考察

3. 堀田芳子研究員による考察

『子育て支援』について

—子育て支援の現場から—

真夏の午後2時、ジリジリと照りつける暑さが都心の駅のホームをも覆い尽くしていたある日のことでした。若い母親がぐっすり寝込んだ8か月くらいの赤ちゃんを抱いて電車を待っていた姿を見た途端、私は子どもの体温と直に触れ合う暑さを思い出し、「眠ってしまうとまた暑いですよ」と思わず声を掛けてしまった。顔を向けたその人はニコツとして「ええ暑いです」とうなずきながらガーゼのハンカチで軽く赤ちゃんの額をぬぐったり体位を整えたりしていた。間もなく入ってきた電車の座席に座れた姿を見届けてから、私は所在なく本に目を落としていた。2、3の駅を通り過ぎようとしている頃、ふと何かを感じ目をあげると先程の親子が立ち上がっていて、私と目が合うと待っていたかのように会釈して下車して行った。

笑顔でその姿を見送ってからも、何となく母親のその視線が気になり、落ち着かなく読書に身が入らなくなってしまった。。。。。。

今も忘れられない感覚、気になっている経験です。「子どもって待っていると自分から離れていくんですね」遊具の上で遊んでいるS君を見ながら、ゆったり晴れやかなNさんの声です。S君は今3歳6か月です、先程まで母の回りでウロウロしていたSくんには声を掛けると、母の陰から顔を出して昨日家族4人で出かけた公園での話をしてくれたばかりです。昨年からは姉弟で参加していた月1回の親子教室で、思うようにいかない時には30分でも泣き続けたり、無言で表情も体も固まってしまう等かたくなな姿を見せる姉の育ちに心をずっと痛めて来たのです。幼稚園の誕生会で姉は挨拶もできるのに、自宅では一人で食事などせず母に食べさせてもらっていたという。親子教室では姉との時間を大事にしたいとS君はこの3月まで父と留守番だったのです。その姉も言葉がけに時には柔らかい表情を私たちにも向けられるようになって、この3月には小学校へと卒業していきました。少しずつSくんも1歳の頃の屈託ない表情や行動、笑顔を取り戻して来たようです。長かったその山を乗り越えこの頃は他の保育園の子育て支援にも参加し、S君との時間を楽しみ、子育ての喜びを感じているという。そして「室内遊びより戸外で遊んで欲しいのでこの園庭開放に参加している」「公園では誰かいると12時になっても帰りたがらない。ここではルールとして納得できるようだ」「先生や他のお母さんと気軽に話せるし、子どもとの関わり方も学べる、子どもも仲間との関わりここで学んでいるようだ」「子も一緒に遊べる友達も出来、ホッとしている」という。

子どもが育ちにくい時代、子育てが難しい、また子育ての二極分化も進んでいるといわれる時代が続いています。

そして、いま保育園に限らずいろいろな方面から様々な子育て支援が始まっています。

先日も母親が買い物をする時間に子どもを預かるという商店会の話題が放映されていました。新聞には『親子で仲間作りを』と空き店舗を活用して乳児や同じ年頃の子を持つ母親らが気軽に立ち寄れるスペースを開設した NPO 法人の紹介、女性に仕事だけの人生でなく、子どもを育てる生活の素晴らしさも味わえる人生をと呼び掛けているグループの記事など話題も豊富になってきています。横浜市や愛知県で乳母車を畳まずにバスに乗せられたり、乗客に乳母車を貸し出す駅も出現するなど、やさしい母子への事業が順調に立ち上がっていく事を願う。また父親の子育て参加の記事や保育園の父親教室などの成果も出てきているようで、赤ちゃんを抱っこする若い父親、側で母親がかいがいしく手伝うなどのほのぼの心温まるような姿も時々見掛けるようにもなりました。

さまざまな子育て支援をそれぞれのお母さん方がその時々を選択できつつあるようです。できればこのような支援の中でも自分からは何も言えない子どもたちにとってもそれが居心地よい時間に、その経験が明日に繋がるものが選択されていくことを願っています。子育てしやすい環境を作ることで、若い夫婦が安心して子育てができる、充実した子育て時期を過ごせ子どもも元気、というようなよりよい子育て支援の環境とはなんでしょうか。確かに母親の安定した心や生活、自立は子どもたちの幸せに繋がることでしょう。子育て支援には母親側へのサポートと共に子どもたちの心身の健やかな成長を守っていくという大きな使命もあります。今回のアンケートに子育て支援の重要性を訴えると共に、次のような意見も見られました。

- *子どもの心をどう育てるか、将来大人となる人間をどう導いていくのが重大
- *各家庭の育児力をいかに高めるか。親が仕事をしているから子育てを保育園に頼る、親のリフレッシュのための一時保育をすとか、親を甘えさせていないか
- *親は子を育てていく責任がある。子育てへしっかりした強さを持つてほしい
- *子育て環境は充実してきているが、妻、母としての自覚は乏しい『親教育』の必要性、中・高・大学生の実体験や「親意識」「子育ての知識」を
- *少子化対策に根本的な見直しが必要、国も対策を
- *子育てへの社会土壌を社会がもっと作っていくべき
- *利用する側もサポートする側も使いやすくなければ本来の支援に繋がらない、すべての面に予算づけが不可欠などなど

存分に子どもたちの世界を（ゆっくりコツコツと）一人一人、心のままに動き、遊びを楽しむ子どもの世界では時として周りの子どもたちと触れ合いや行き違い、衝突も起こり、冷淡や無視、強引な行動も見られ、周りの大人たちを心配させたり驚かしたりまた感心させたりします。

先日の親子教室『つくって遊ぼう』でも手持ち無沙汰な子どもたちが、それぞれのクレヨンを持ち寄って大きな紙に描画を始めました。泣き声も聞かれず時間が流れていきました。がそのうち他の子のクレヨンを勝手に使う子が現れ、気付いてそのクレヨンが気になり動きが止まってしまったり、描く場所を占領されてしまった子、大事

な絵を汚されてしまったり・・・・・・・・。2、3歳の子どもたちはじっと周りを見つめ、戸惑いや不安を感じながらも、だんだんとその子なりに意思表示し始めます。さりげなく避ける、対抗していく、あきらめて他の遊びを始める、目で訴え助けを求め、そして母を引っ張ってくる子、言葉で訴える子など様々です。時には周りの母親たちも加わり子どもたちの行動に共感したり納得させられたり、かわいい発見があったり感心したり、子どもたちと共にいる喜びや楽しさを感じたり、応援し合ったりしています。

遊びを楽しみ、共感し合いながらも時々トラブルも起こり、子どもたちは互いに小さな心を最大に働かせていく。周りの子の表情や姿、声、言葉を見たり聞いたり懸命に感じ、受け止めながら相手の存在と気持ち、言葉を知り、そして自分の思いを叶える対応方法などをだんだんと知っていく時代でもあると思います。時には大人に教えられたり共感してもらい支えられて一步步積み重ねていける。

そこには仲間がいて楽しい遊びがある、そのために自己表現し合い、衝突したり、思いを叶えられたりあきらめたり、それは自分で自分の心を強くし、広げ、柔軟にしていくことにも繋がる、大切な心の育つ場です。

そんな経験に伴って起きる心の動き、悔しさや憎しみ、寂しさ、怒り等の不快な感情も、言葉で表現できるようになる大事な子どもの心の成長も、近くにある大人に共感し認めてもらえた安心感からでしょう。

また自分の気持ちをその人に伝えたくなくて、言葉で、関わりやコミュニケーションを持ち、子ども自身が家族以外の人との人間関係も育てていける場でもあるでしょう。子どもたちが自分の力をいろいろ使い始めていく時期に、近くの大人にその力を借りて、次第に見通しや自制力など持っていく。そして試行錯誤しながら社会への適応、生きていく力を育てていく。そんな姿をゆっくり温かく待ちたいと願う。子どもたち皆に備わっている育つ力は、それは日々の生活の中で一つ一つ時間をかけながらコツコツと積み重ねられ、自然と身に付いていけるものでしょう。

次のような手紙を頂いたこともあります。「・・・一人娘は4月から保育園の2歳児クラスに入園しました。入園当初は朝の別れも泣かないで慣れた頃に何かあるのではと心配していました。丁度反抗期というのか何を言っても『イヤ』が口癖のような時期でしたが、怒られたり気に入らないことがあると、蹴る真似をしたり『プッ』と唾を吐くことがあり、そんな時には「家ではそんなことをする人がいないから保育園でする子を見ているんだね」くらいで済んでいたのですが、最近では直ぐに『ベェッ』と舌を出したりだんだんひどくなっているので注意をしたり話をしていました。集団に入ったのでいろいろなことを覚えていくのは仕方無いことではあるのですが、心の重いことでした。

5か月くらい経った頃、他の子が娘に声を掛けてくれる姿が増え、娘も家でクラスの数人の子の名前をあげていたので仲良くなってきたのかと思ひ嬉しかった。しかし

娘は『おはよう』『あそぼー』と言われても『ヤダ』と返事をするんです。そして逆に娘が声を掛けるとやはり『ヤダ』『キライ』と言われてしまう。娘はすぐに『キライじゃないでしょ』と言い返していたが親の私は思わず言葉を失ってしまった。

私がお迎えに行った時のことです。

私の姿を見てもすぐに帰ろうとしない娘にクラスの子は「お迎えにきたらすぐに帰りなさい」と笑いながら言う。その後娘が友達の遊んでいたおもちゃを横取りしようとするので止めたら、その子のほっぺをつねったんです。あわててとめると娘は先生に『〇〇チャンが私のほっぺをギュッとしたの！』とまるで逆さまのことを言いつけ、その先生が何も言わないと次の先生へまた言いつけに行ったのにはア然としました。

目の前で友達をつねっただけでもショックだったのに先生に言い付けたり、こんな意地悪だったなんて・・・・・・・・・・。

帰路、言葉も少ない私に娘は何事もなかったようにいつものように話しかけたり、歌いかけていた。

丁度娘は周りの真似をなんでもしたがるが「ヤダ」「キライ」など拒絶の言葉を言ったり、何かあったら直ぐに先生に言い付ける、時にはつねる、蹴っているかも。集団生活をする中で子どもなりの知恵かもしれないが、親としてはそんな行動していたり、キツイ言葉を我が子が言われて、そして言っていると思うと心穏やかではなくなってしまう。もっと違うコミュニケーションの取り方はないのかな・・・・・・・・・・とも思ったりしてしまう。

先生に注意されたり助けてもらい、そんなことを繰り返しながら、一つ一つ大きくなっていくんだと思ったりしていますが・・・・・・・・・・。」

共に過ごす時間を（一緒に同じことをしながら）

支援事業が始まり目的、方法もいろいろと広がって、一時保育など母親のリフレッシュにも利用できるようになってきました。さまざまな母子関係があり、子どもの年齢や性格、家庭の事業などによってその利用理由もありますが『大変だから』『回りに迷惑を掛けるから』『子どもが可愛そうだから』などと子どもを預ける。母子が別れて時間を過ごす事もあります。そして確かにその必要性を感じることもあります。

子の泣き声や自己主張、反抗に出会ったり、気持ちがわからない時など対応が難しく、戸惑いや悩み、苦しみ、不安になったり葛藤することは辛く、耐え難くできれば避けたいと思ってしまう勝ちです。

母子で互いに葛藤しその大変さのなかで、子どもの姿やサインなどから見えたり感じられてくるもの、子どもが戸惑っている事や気持ち、関わり方などに気付いてくる事もあると思う。そのひとやまを乗り越えられると次第に要領も得られ、母親にとって子どもの行動や思いがわかりやすくなったり、対応方法も考えられるようになってき易い。その大人の気付きが子育ての喜びや楽しさに通じたり、それが子どもとの関係づくりにもなってくる。子どもも一緒にいることで自分を意思表示することの大切

さや母の気持ちも次第にわかって来、互いに関わり易くなったり、その喜びや安心感は互いに意欲や自信に繋がるでしょう。そんな母親の姿勢を伝えられたり支えられる場でもありたいと願う。

一人の子どもが両親のすぐ近くでゆったりと安心して遊べるのも長い一生のなかでは短い時間でしょう。子どもが必要としている時にしっかり子どもに向き合う事で子育ての実感や喜びを得、人生においても親としての力や自信、自負をも持っていけないのではないか。

親の気持ちや立場を優先するあまり、安易に支援していくことは親子の絆作りの場や子どもが人として成長していく上で必要な経験の場を奪ってしまうということにもなりかねない、難しいところです。

まとめ

日本の将来を担っていく子どもたちの心身を健全に育てていくことは誰もが願っている大きな課題です。

我が子を大切にしっかりと向き合っている子育てしている両親も数多く存在している中で、親として子どもと真剣に向き合えない人がいるのも確かです。自分の仕事や生きがいなどを優先し、親という立場を意識するより自己中心的、親として子どもとの関係が作れない大人たちもいて、加えて早く、効率よく、きれい、簡単、便利なことが優先されていて、少子化や核家族、高学歴社会、地域連携の稀薄さなども続いている社会です。そんな社会の中にいる子どもが親にとってよい子、理想的な子ども像が求められることが多くなっている。寄り道やゆったり、回り道もよしと願う子ども時代の生活とは相反することも多いのが現状です。

社会や文化が向上し、早く、効率よい、きれい、簡単と生活しやすくなった結果、その裏に潜む複雑さが見えないネガティブな面も不気味に存在しています。

最近、心が塞がるような事件の多発さ、痛ましい子どもの心の歪み、思っていること本心が言えない、行動できない子の姿なども報道されています。大人も子どもも、心の疲れ、病んでいる姿が目立ちます。

子どもたちの健康でしなやかな強い心と、人との関わり方、コミュニケーション力を育てる大切さを今痛感しています。『しっかりと子どもと向き合い、子どもの生きていく力、自ら育つ力を信じ待っていく子育て』そのスタートの基礎づくりをきちんと大人が守っていかなければ、子どもたちは健全に育ってはいけません。

子ども達が、日々子どもとしての時を刻んで、身の回りの環境のなかで、心身共に健やかに育って欲しい。

そのためには、伸び伸びと自由に遊べる場や存分に選ぶ時間、必要に応じて仲間がいること、戸外での遊びの場などが必要です。そして見たり聞いたり匂いを感じたり、触ったり、そうした感覚を総動員して、外の世界と関わり、心身を育てていく豊かな実体験、試行錯誤できる経験の場を確保してあげることが必要です。

一人っ子を育てる親が、家庭では作れない人との関係を経験させたくて、保育園に入園させるという話もよく聞きます。

子どもたちの日々の生活や中心となる遊び、人との関わりを通じて自然に育っていく日常生活の基本が崩れ『夜更かしの習慣』『食生活の乱れ』『抱っこやスキンシップの減少』等、子どもを取り巻く環境の中で気になる子育ての実例がいたるところにあります。

保育園には子どもに必要な環境があり、必要に応じて親子が気軽に参加し、リフレッシュでき子どもの成長の場として、また母親が子育てを喜び合え確かめたり広めたりできる場としての価値は大であると思う。

そして、そこには、見たり、聞いたり、時には一緒に行動しながら伝えていく『具体的な姿の提示やおかあさんがたが納得でき、わかりやすい関わりやお話』のできる保育者が存在しており、地域の子どもたちを守る最前線の砦としての施設が多くの人々に必要とされている。

保育士がその力を十分に発揮できるような環境づくりを、そして保育園もその機能を十分に生かしていけるよう国や地方の機関からしっかり支えられ、安定した環境整備をすることが今求められている。